




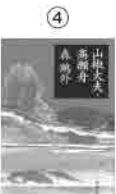








TAKE FREE!

<http://www.kawade.co.jp/furuiyoshikichi/>

古井由吉自撰作品 刊行記念

別冊 古井由吉

1. 夏目漱石／森鷗外／徳田秋声

- ① 「文鳥・夢十夜」
夏目漱石
〔新潮文庫〕

- ② 「思い出す事など」
夏目漱石
〔岩波文庫〕

- ③ 「硝子戸の中」
夏目漱石
〔新潮文庫〕

- ④ 「山椒大夫・高瀬舟・森鷗外」
森鷗外
〔新潮文庫〕

- ⑤ 「阿部一族舞姫」
森鷗外
〔新潮文庫〕

- ⑥ 「キタ・セクスアリス」
森鷗外
〔新潮文庫〕

- ⑦ 「あらくれ」
徳田秋声
〔講談社文芸文庫〕

- ⑧ 「徴」
徳田秋声
〔岩波文庫〕

- ⑨ 「新世帯・足袋の底 他二篇」
徳田秋声
〔岩波文庫〕

- ⑩ 「芭蕉七部集」
芭蕉七部集
〔岩波書店〕

- ⑪ 「新古今和歌集」
角川ソフィア文庫
〔角川ソフィア文庫〕

- ⑫ 「今昔物語集」
角川ソフィア文庫
〔角川ソフィア文庫〕


2. 日本古典

3. 西洋古典

- ⑬ 「オデュッセイア」
ホメロス
〔岩波文庫〕

- ⑭ 「イリアス」
ホメロス
〔岩波文庫〕

- ⑮ 「神曲」
ダンテ
〔河出文庫〕

- ⑯ 「白馬の騎士」
シュトルム
〔岩波文庫〕

- ⑰ 「ファウスト」
ゲーテ
〔集英社文庫〕

- ⑱ 「水晶他三篇」
シュテューブナー
〔岩波文庫〕

- ⑳ 「マクベス」
シェイクスピア
〔新潮文庫〕

- ㉑ 「ドウイノの悲歌」
リルケ
〔岩波文庫〕

- ㉒ 「審判」
カフカ
〔白水リブックス〕

- ㉓ 「巴里の愛戀」
ボードレール
〔新潮文庫〕

- ㉔ 「赤と黒」
スタニスダール
〔新潮文庫〕

- ㉕ 「ボヴァリー夫人」
フロベール
〔河出文庫〕

- ㉖ 「旧約聖書 出エジプト記」
〔岩波文庫〕

- ㉗ 「東京焼盡」
内田百閒
〔中公文庫〕

- ㉘ 「フツテンブローケ家の人びと」
トーマス・マン
〔岩波文庫〕

- ㉙ 「疫病流行記」
デフォー
〔見代思潮新社〕


4. EXTRA





第1回配本 作品ガイド

「古井由吉自撰作品」第一巻 『杵子・妻隠／行隠れ／聖』(解説=朝吹真理子)

「杵子」 1970年8月発表(「文芸」) 1971年第64回芥川賞受賞

ある初冬の山道、主人公が谷底で一人座る杵子に出会うところから物語ははじまる。神経を病んだ杵子の、あまりにもか弱い存在感に惹かれ、甲斐性とも恋心ともつかない思いで杵子との距離を縮めてゆく。

主人公を通した杵子の細かな拡大描写の生々しさに、読み手は恐ろしさすらおぼえるだろう。また、第64回芥川賞受賞作でもあり、当時の選考委員であった川端康成や石川淳をはじめ、ほとんどの委員により絶賛される。では別の作品を推した委員は何を? 驚くべきことにおなじく候補となっていた古井由吉の「妻隠」である。



■ 河出書房新社 初版本(装幀・司修)

「妻隠」 1970年11月発表(「群像」) 1971年第64回芥川賞候補

わずか半日あまりのできごとながら、ある夫婦の微妙な関係性を豊穣に描いた中編作。老婆の突然の来訪が呼びおこす夫婦の心身の揺れ動きを、匂い立つほど精緻に描くその文章に息をのむ。また、老婆や近隣アパートの建設業の青年など、時にユーモラスにも描かれる登場人物が印象的である。

第64回芥川賞選考会では「杵子」と票が割れ、若き古井由吉の新境作として井上靖や中村光夫が推した。

〈映画版「杵子」について〉

「杵子」 1977年制作

監督 伴睦人
出演 山口小夜子(杵子)／石原初音(杵子の妹)
後藤和夫(青年)／真家宏満(杵子の恋人)
絵沢萌子(電車の乗客)

『NEWS WEEK』誌が「世界のトップモデル」としておかつ頭に切れ長の目をした日本人モデルの写真を、アジア人としては初めて掲載したその年、そのおなじ「トップモデル」は、日本の映画スクリーンで「杵子」と呼ばれ身を震わせていた。「杵子映画」でググると山口小夜子の名前ばかりでてくるところを見ると、きっと相当印象的な演技だったのだ。残念ながらソフト化されておらずいまは観ることができない。DVD化の待たれる名作であるにちがいない。

第64回芥川賞

選考委員

石川淳／石川達三／井上靖／大岡昇平
川端康成／瀧井孝作／中村光夫／永井龍男
丹羽文雄／舟橋聖一 (石川淳、永井龍男は欠席)

候補作品

古井由吉「杵子」／古井由吉「妻隠」／畑山博「狩られる者たち」／日野啓三「めぐらざる夏」
李恢成「伽椰子のために」／森内俊雄「傷」
倉島齊「兄」／黒井千次「闇の船」

10名中7名の選者が古井氏に「◎」という、ほぼ満場一致の選考会であったが、それでも「杵子」と「妻隠」を巡り評が割れた。

「妻隠」を推した選者はなべてこの作品を新境作として評価している。実際、ある特異な人物像を細やかに描いた「杵子」と、夫婦における人間関係の淡いを描く「妻隠」は異なった読後感をもたらす。新境といわれた「妻隠」における家族の距離感、たしかにその後の作品では変奏しつつ度々描かれる。しかし改めて「杵子」を読むと、杵子の台詞は近年の古井作品の説明となっているようにも思える。これは何を意味するのか。当時の選考委員がつけた「杵子」と「妻隠」をめぐる「◎」のゆくえを、また、現在の古井由吉へと通じる変遷を、後進である我々は幸いにしてたどることができるのである。この8冊の「古井由吉自撰作品」で。

「行隠れ」 1972年8月発表(「文芸」)

妹の結婚式前日に失踪した姉。結婚式にあつまった親族たちに対する家族の、凄まじいまでの身体描写が不在の姉をめぐる心の不安を浮きぼりにさせる。片足の不自由な姉のイメージが、不在ゆえの淡さをともないそれでも印象的に、まるでこの世のものとは思えない存在感で心をうつ古井文体の妙を、存分に味わえる。芥川賞受賞第一作となり、5編からなる連作の方式で書かれた初の長編。脚を引きずって歩く姉の描写が素晴らしく美しいため、ファンの間では、これが特に好きな作品という人も多いようだ。

行隠れ 古井由吉



■ 集英社文庫(装幀・白根光夫)

「聖」 1976年5月発売(新潮社) 1976年第4回泉鏡花文学賞候補

山登りの帰路、偶然おとずれたお堂に、突如現れる若い女。女の語る村落共同体の狂気じみた習俗に巻き込まれながら、主人公は女と関係を結んでゆく。張りつめた文体と豊かなストーリー展開が読み手をひきこむ初期の傑作。

なんともエロチックな設定だが、異界からやってきたような女の存在感が、色気をともないながらある恐ろしさを喚起させる。また、これには続編があり、「栖」、「親」へとつづく三部作の第一部である。

「聖」「栖」「親」三部作

古井由吉においてきわめて重要な三部作といわれる。山村を舞台にした「聖」につづき、おなじ男女が今度は都市でめぐりあう「栖」(第12回日本文学大賞)、そして女のさらなる狂気へとひきこまれてゆく「親」。この三部作に関しては、第4回配本『親／山隠賦』に収録予定の、佐々木中氏による38ページにもおよぶ大部の巻末解説をぜひ読んでほしい。なお、「栖」は第7回配本(9月刊予定)に収録予定。



■ 新潮社 初版本(装幀・司修)

〈解説者紹介〉 朝吹真理子

東京都出身。2009年10月『流跡』(新潮社)でデビュー、2010年第20回ドゥマゴ文学賞(選考委員堀江敏幸)を受賞。2011年、『きことわ』(新潮社)で第144回芥川賞受賞。いまもっとも注目を集める若手作家のひとり。

別冊 古井由吉

2012年2月発行

河出書房新社 営業部

tel:03-3404-1201



古井由吉自撰作品 [全八巻]

第一巻『杏子・妻隠／行隠れ／聖』解説=朝吹真理子

2012年3月13日(火) 発売予定 【刊行記念特価2,730円(税込)】

月報にて古井由吉書き下ろし「半自叙伝」を収録

※特価期限2012年9月末日迄
以降、定価3,780円(税込)

〈全巻揃定価27,510円(税込) 全巻予約特典 著者自筆サイン色紙贈呈〉

※詳細は、書店店頭にて配布中の内容見本をご覧ください。

河出書房新社 営業部